

文献紹介

港湾産業研究会編

『輸送革新と港湾産業』

——新しい港湾産業——

柴田悦子

(大阪市立大学)

「港湾産業研究会」（横浜・昭和40年発足）が、その研究成果の第三集『輸送革新と港湾産業——新しい港湾産業——』を発刊された。本著の巻末に発足以来58回にわたる研究報告会のテーマと「ジュニア部会（44年2月発足）」の研究動向が掲載されているが、とにかく大変な勉強家ぞろいである。研究を本業とする大学人の場合をみても、5年にわたって毎月定例の研究会を開き、その成果を3冊の単行本にまとめ発刊していくエネルギーは、あまり持ちあわせていないようである。この意味で先ず「港湾産業研究会」のメンバーの方々のたゆみない努力に対して敬意を表したい。

さて、本著は港湾産業を中心にまとめられており、従来港湾運送業とよばれていた零細中小企業がその体質的弱点をいかにして克服し、新しい港湾に適応した港湾産業に脱皮しうるかという課題をテーマとして、これについてあらゆる角度からの解明が試みられている。本著の構成は下記のとおりである。

「港湾産業」の展望とその理念

北見俊郎

——序にかえて——

港湾機能の「合理化」と港湾運送

喜多村昌次郎

——埠頭ターミナル事業促進法——

雑貨埠頭ターミナル経営論序説

宮地光之

——港湾産業の新しい道をもとめて——

新しい港湾と港湾産業のあり方に関する一考察

今野修平

港湾運送業の合理化と資本集中

玉井克輔

——主として戦前における史的考察——

港湾の資本蓄積に関する一考察

原田竜次郎

コンテナ輸送と港湾運送業の課題	市川 勝一
コンテナターミナル要員の訓練と養成	田中 英輔
コンテナ国際複合運送展望	松本 好雄
変ぼうする鉄鋼材の輸送構造	山村 学
——鉄鋼専門埠頭の役割と問題点——	
臨海穀物ターミナルサイロの役割と今後の課題	松木 俊武
港湾労働近代化の手法としての港湾荷役工学	松橋 幸一
ハンブルグ港における港湾体系事情	北見俊郎・荒木智種
——主として港湾産業と情報機能をめぐって——	

序にかえて書かれた北見論文は、港湾産業を重要産業の一つに位置づけながら、旧い体質からの脱皮の緊急性を説き、経営者意識の変革と業界の近代化、港湾産業人として教育の必要性、さらには港湾の外的条件を形成する港湾行政の改善の重要性を主張しておられる。

喜多村論文は、かつて昭和40年流産に終わった「埠頭ターミナル事業促進法」が、コンテナ埠頭や近代的新鋭外貨埠頭の完成にともない、再びその必要性が認識されはじめた背景と経過を説明され、そのためにも港湾運送業の近代的脱皮の必要性を述べられている。

宮地氏は、貨物の流れに適合した港湾条件を整備するとともに、その効率的運営の可能性を経営学的立場から考察され、今野氏は、将来における港湾の姿を従来とどってきた港湾の歴史の変遷のプロセスから導き出そうとされる。大規模工業港湾、流通拠点港湾、レクリエーション港湾など新しい港湾の姿と同時に、新しい港湾に結びついた港湾産業の育成が主張され、いわばターミナル・オペレーター論序説といった内容である。

玉井氏の論文は、戦前における資本主義の発展と港湾運送業発達史である。明治・大正時代資料的にも収集困難な時代を、社史などをたんねんに試べられ、港湾論で空白となっていた港湾業発達史をとめられた点、今後この面の研究に大いに役立つといえる。

原田論文は、港湾産業の立場から資本蓄積を論じ、それをはばむものとして港湾産業の下請、再下請制度、さらに海運資本への系列化などをあげられ、港湾料金の適正

化を論じられる。市川氏は、コンテナ輸送がそれぞれ港湾運送業におよぼす影響について述べ、海陸一貫輸送の実現の中で港湾運送業が解決せねばならぬ課題を指摘されている。

田中論文は、コンテナターミナル要員の教育訓練に関したもので、機械技術訓練を中心として安全訓練など具体的な問題指摘が多い。コンテナの国際複合運送の実務的展開をされた松本論文、鉄鋼材の流動を通じて鉄鋼埠頭の問題点と理想像を述べられた山村論文、穀物ターミナルサイロの経済的効果とサイロ料金、免許など未解決部分と矛盾が指摘される松木論文、いずれも具体的今日的テーマを扱われているだけに、今後の新しい港湾建設や港湾運営に得るところが多いであろう。松橋論文は、港湾労働に港湾荷役工学を導入し、パレチゼーションの大巾導入とともに労働科学の対象として港湾労働を省力化する方向が示されている。

さいごの北見・荒木両氏による論文は、ハンブルグ港の発展を情報機能の発展を通じて展開されためずらしい試みの論文である。

以上本書におさめられた各論文の素描を簡単に紹介したにすぎないが、数多くの著者が「港湾産業」という統一的テーマにあらゆる角度から接近している点は、論文集といった型態を脱却しているといってもさしつかえない。なかには具体的事象の列挙や、不十分な分析あるいはあまりにも大きなテーマの設定による不消化など若干気になるものもあるが、全体的に不十分な部分を補ないあって一つの成果にまとめられ、一冊の著書としても成功しているといえよう。今後「港湾産業研究会」の発展を期待し、より飛躍的成果が次々発表されるのを読者とともに待望する次第である。